

十二月十二日

〔甲〕 我國の米收穫高

明治九年	二六、五九九、一八〇石
同二十年	三九、九九九、一九九石
同三十年	三三、〇三九、二九三石
同四十年	四九、〇五二、〇六五石



△東京に始めて電

話交換局を設く

(明治二三年)

△俳句

泣くよりもあは

れ棄兒の笑ひ顔

大正元年	五〇、二一六、一五三石
大正十一年	五五、三三七、〇〇〇石
大正十三年	五六、一六七、〇〇〇石

〔乙〕 吾唯足知



上下や右も左も口に守れば、
われも足ることを知る。

△朝起は家をねさ

せぬ心がけ

十二月十三日

〔甲〕〔乙〕 食合せ御用心

- △そばとたにし
- △たこと生うめ
- △しほからとさつまいも
- △うなぎと梅干

△さばとすもゝ

△かきとえび

△びはとあづき

△かきとたこ

△どじょうとところてん

△西瓜とてんぷら

△とび魚とかぼちや

食合せといふことは、消化不良になつて下痢をしたり、腹痛をおこしたり、時には生命を失ふこともあります。

十二月十四日

〔甲〕 赤穂四十七義士討入

我國武士道の精華と稱へられて、書物に歌に話に末の末まで名を輝かしてゐる。赤穂四十七士が主君淺野公の仇なる、吉良上野介の首を討ち取つたのは、實に元祿十五年十二月十四日の夜明け方であつた。非常なる苦辛慘膽と困苦缺乏を堪へ忍んで、手落なき準備と、満腔の忠誠とによつて、かゝる偉大なる花が咲き永久に香しいのである。

△富める時儉約を

用ひず、貧乏に

なりて悔ゆ。

〔乙〕 童 新聞

新聞屋さんが来た

新聞の香がはなをつく

そつと一枚はぐつた

又香がした

十二月十五日

〔甲〕 韓魏の四誠

一、無益の事をなすなかれ

二、無益の言を謂ふことなかれ

三、無益の書を見ることなかれ

四、無益の友に親しむことなかれ

〔乙〕 帯のしめ方

幅のひろい帯を、かたくしめることは、腹と胸をおさへてよくない。血のめぐりをさまたげるし、姿勢もよくありません。自分／＼の帯のかたさとしめ所を考へねばならぬ。

△水積りて淵とな

り學積りて聖と

なる

△義は百事の始め

なり

十二月十六日

〔甲〕 臺所三幅對

- 一、ごまめに、にまめ、まめし(吉事、慶事)
- 二、とうふ、高野、(とうふの味天下第一高野はくさらぬ)
- 三、味噌 (一日もなくては困る)

これほど重寶なものはない。豆位効能の多いものはなし。

〔乙〕 欠伸はどうして起るか

たいくつ、くたびれ、ねむい時に起こります。肺の中のわるいがすがあひ出されて、よい空気と入れかはりますので、一種の深呼吸です。

十二月十七日

〔甲〕 かごかきのかけ聲

「堪忍だからじゃ。正直家督じゃ。辛抱は金じゃ。短氣はそんなじゃ。覺悟は大事じゃ」

△豆腐屋へ一里

酒屋へ三里

△沈黙は眞理の母

なり

△常に不養生にし

て病める時悔ゆ

昔箱根の峠を、かごかきが重い荷物の時はこんなかけ聲で通つたと申しま

〔乙〕 我々の一日に吸ふ空氣

△一回平均二合

△一分間二十回呼吸すると四升

△一時間二石四斗

△一晝夜五十三石六斗

十二月十八日

〔甲〕 豆と我等の身體

國民の心身健全と豈科植物とは大なる關係をもつてゐます。食物の調理に豆の入らないものはない。そのまゝ食ふか、形をかへて食ふかのちがひである。昔の高僧等が肉食禁止して盛んに活動した體力も、精進料理に豆を使つたためせう。

△横須賀鎮守府を

開府す

(明治十七年今月

今日)

△熟考と猶豫は似

て非なり

〔乙〕 呼吸器のせいせい

- 一、新らしい空気を吸ふこと
- 二、呼吸運動を練習して肺を丈夫にすること。
- 三、呼吸は口より、成可く鼻からすること。

十二月十九日

〔甲〕 誤り易い類似の文字

雨リヨウ雨フ 東カン東ヒガシ 競オン競マシ

折チカ折ヒキ 折マシ折ツツ

〔乙〕 臘 夕月

心ぼそいな鳴聲が

小やぶの向ふでしてゐます

きつと

はぐれたあひるだろ

△大岡越前守忠福

卒す(寶曆三年)

友をなくしたあひるだろ

それとも路に迷ふたか

心ぼそいな鳴聲が

小やぶの向ふでしてゐます

空には細い二日月

細い目のような二日月

十二月二十日

甲) 文 冷水浴

暖い寢床を抜けて井戸端にいった。朝露に南天の實が一そう引立つて見えます。「寒い」と思ふと手まで縮むやうな気がした「何」と思ひきつて着物をぬぐ瞬間!! 續けざまに四五杯水をかむつた。乾いたタオルで力一ぱい摩擦した、赤い身體を冷たい朝風が心地よく吹いて行く。

△名譽は生命の如

し一度失へば再

びかへらず

△老人の訓言は貴

年の武器

〔乙〕 俳 年の暮

農村適用指示教育資料

來年はく〜とてくれにけり

十二月二十一日

〔甲〕乙 笑

△笑ふ門には福來る

△笑ふ人泣く人暮る、師走哉

△家中調子揃へて大笑ひ、これ極樂淨土の音樂の聲

十二月二十二日

〔甲〕乙 今日冬至

一年中で一ばん晝が短くて、夜の長い日です。あすから一日〜日長くなつて夜が短くなります。こんなになるりくつを知つてゐますか研究して見ませう。

十二月二十三日

〔甲〕乙 年賀郵便

△北清事變媾和成立

本月十五日ごろから二十九日ごろまで郵便局で年賀郵便を取扱ひます。年賀郵便と云ふのは、新年の賀状を年の内に送つておいて、お正月が來たらくばるのです。普通の出し方によると、年賀状が年の内に着いたり、又はお正月おそく着いたりします。しかし「年賀郵便」と袋か包んだ紙にかいておかないと、普通郵便に取扱はれます。

十二月二十四日

〔甲〕乙 學校の一年間

一月一日 新年拜賀式

一月六日 始業式

二月十一日 紀元節 修學旅行

三月二十五日 證書授與式と展覽會學藝會

四月一日 入學式

五月 母姉會 遠足

△庶人の佩刀を禁

ザ

(明治三年今月今

日)

六月廿日より一週間 田植休み

八月 中 暑中休暇

十月 部落母姉會。遠足

十月三十一日 天長節祝日

十月二十日 運動會

十二月十四日 赤穂義士會

十二月二十五日 終業式

十二月二十五日

〔甲〕乙 明日から冬休み、

皆さん、よい新年をむかへなさい。

なんと月日のたつのは早いものです。

今年は、これでお別れしませう。

△運命を廻轉すべ

く力行せよ

下編

一月一日

〔甲〕 四方拜

元日や神世のことと思はるゝ

長くも天皇陛下は、元朝未明に御庭に出御あらせられて、伊勢の皇大神宮は申すまでもなく、天地四方の神々を御遙拜になります。元旦に當らせられて我國のいや榮えに榮えて、國民の幸福安堵を祈らせ給ふ、實に畏き極みにて、かゝる例は外國にては、夢あるまじきことなり。

〔乙〕 新年おめでたうございます。

一月六日

〔甲〕乙 始業式

新年になつて、早や五日たちました。誠に早いものです。いよ／＼今日から第三學期の始まりです。皆さんは、お年が一つふえて來ましたから、勉

△豊太閤生る

(天文五年今月今

日)

△聖徳太子誕生

(千三百六年前今

月今日)

△旅順陥落

(明治三十八年今

月今日)

強も一つ元気で新しい気分になつていたしませう。

一月七日

〔甲〕 人生の計

- △一生の計は幼年の時にあり
- △一月の計は朔日にあり
- △一年の計は元旦にあり
- △一日の計は鶏鳴にあり
- △一家の計は和順にあり
- △元日は大晦日のはじめ哉

〔乙〕 今日と明日だけ

いくら長生きをしても、今月今日は二どとありません。小さい時に勉強しないと年がよつてからこまります。

一月八日

△今日只今

一日道を忘れ、
ば一年の流行に
おくれ、一月業
を忘れれば百年の
身を失ふ恐るべ
きは今日只今。

〔甲〕〔乙〕

純文 新年の覺悟

一年中で一ばん嬉しいのはお正月である。お祭よりおぼんより何より一ばん嬉しい。何だか氣持ちがよい、新しい氣分に天地萬物がなつたやうに思はれる。

この新しい、今年はまだ何千年何万年たつても來ません。『元旦は大晦日のはじめなり』と古人がいつた。月日は流れる水の如くて、早く行つてしまひます。けれど實際に時間を大切に勉強しません。僕は本年こそは、「不言實行」を天地の神々に誓つてゐます。

一月九日

〔甲〕 略字のかずく

- 國語||口語 歴史||厂史 五錢||五钱
- 廣告||広告 拂渡||払渡 佛前||仏前

〔乙〕 鼻の孔はなぜ二つか

農村適用揭示教育資料

△義務教育の學齡

を定む

(明治八年今月今

日)

△今日出来る事は

今日せよ決して
明日に延ばすべ
からず

鼻は息をするときに、空気の入出する大そう、大切なみちです。もし一つしかなくて一つがふさがつたら、いきがとまります。その用意です。しかし入口は二つでさきの方は一つです

一月十日

〔甲〕乙 土は寶

或百姓が死際に三人の子供を枕元によんで遺言をした。「父さんが門の田に寶物を埋めてゐるから、我が死んだ後は、これをほり出せ」と。父が死んだ後で三人のものが、われ一となつてすみくまで、何べんもく深くほりましたが、寶物は一つも出てこなかつた。しかし、その年の米も麥もいつもの倍もとれた。そこで三人のものが父が寶といつたのは「腕に力を入れて額に汗を流して働け」といふことだと悟つた。それから百姓大事によく働きましたので、後には大へんな金持ちになりました。

一月十一日

△現役兵入替

△明治天皇御踐神

(慶應三年今月今

日)

〔甲〕 似て非なるもの

△用心深さと臆病 △丁寧とくずく

△節約と吝嗇 △慎み深さとらちあかぬと

△物知りと出過ぎもの △大膽と横着

〔乙〕 人間の胃の大きさ

胃袋は人によつてちがひますが、まあ八九合は入ります。大食家はもつと入るだらう、いつもく腹一ばい食べると、胃の病氣になります。やはり腹八合がよろしい。

一月十二日

〔甲〕乙 一生の飯米

△人一日に三度食べる

△一度に三ばいとす

△一月に二百七十ばい

△小人隣居して不

善をなす

△農民の手に豆が

出来米が出来

△猿は時間の盜

賊なり

△櫻島噴火す

(大正三年今月今

日)

△一年間に三千二百八十五はい

△一ばい五勺として一日四合五勺

△一年の飯米一石六斗四升二合五勺

△七十才まで生きるとして

百十四石九斗七升五合

△一俵四斗入として、二百六十二俵餘り

一月十三日

〔甲〕 源頼朝薨す（正治元年今日今日）

武家政治の基をはじめた源頼朝は、五十三歳で鎌倉に薨す（今より七百二十六年前）

〔乙〕 金でもつかれる

イギリスの電信局の調べによると、月曜日には電氣がよくつたはるが土曜日には、にぶいとのことである。これはつかれたのである。（イギリスは日曜

△俳句

雪の竹たよくも

慈悲の一つ哉

△英一蝶歿す

（享保九年今月今日）

日）

△始め慣れば終に

悔なし

日は電信も休み）

一月十四日

〔甲〕乙〕 煙草の害

一、血の中に入つて血のめぐりをわるくす。

二、胃の中に入つて食物をこなす力をじやまする。

三、心臓の働きにも、じやまになる

四、肺に入つてはせきをだす

五、目、耳、頭、神経、などをよく又はよわらする。

一月十五日

〔甲〕 農業の本領

農業の本領及特徴は、花々しからず所謂「じみな」點にある。植物でいふと美しき花でない、麗々しき實でもない、隠れたる所に偉大なる努力をなし、偉大なる活動をなせる根のやうなものである。そして花々しからぬ、

△始めて憲兵を置

く

（明治三十四年今

月今日）

△金原明善翁逝く

（大正十二年今月

今日）

△乃木大将凱旋す

（明治三十八年今

月今日）

△俳句

憎しとてたよく

にあらず雪の竹

隠れたるこの農業が一國の盛衰に多大なる交渉をもつてゐる。即ち國家の生命である。農家の子弟はよく心せねばならぬ。

〔乙〕 ちとなり

△むかへ三軒兩どなり

△京の親子よりとなり哉

一月十六日

〔甲〕 俳 藪入

藪入を叱ると聞けば灸のこと

藪入の羽織新しい二子縞

藪入の晝寝してゐる伯母の家

〔乙〕 花より實

△早く花のさき散らんよりは

晩く熟して實のるにしくはなし

△旅は道づれ人は
情け

△虚言は雪の如し
眞理は金の如し

△勞苦する身は何厭はねど

苦勞しがひのあるやうに

(高杉晋作)

一月十七日

〔甲〕乙〕 フランクリン生る(二百二十年前今日)

フランクリンは西暦千七百六年一月十七日北米ボストンに生れた、ろうそくやの子である。家がまづしくあつたから、家の手傳をしつゝ勉強した。

又三度の食事をへらして、そのお金で本を買つた。大人になつて、えらい學者になりました。

一月十八日

〔甲〕 歌御會始(一抵十八日頃)

歌御會始といふのは、長くも天皇陛下より仰出されし、勅題によりて日本國民の眞心をこめて詠進申し上げた何萬首の歌の中から、豫選になつた歌

△最近の勅題
大正五年 晴天鶴
大正六年 海邊松

△始めよきはよし
終に善きは更に
よし

を天皇皇后兩陛下の御前にて、御披講申し上げる、いとも莊嚴な儀式が宮中ではせらるゝのである。こんな儀式、こんなありがたい、國民の心を聞き下さる例は、日本ばかりで外國にはないと申します。

〔乙〕 食後すぐするな

一、きつい運動

二、勉強

三、入浴

四、食後は少しの間静かに休むがよい。

一月十九日

〔甲〕〔乙〕 今日の歴史

△ワット生る。蒸氣機關を發明した偉人である。(西曆千七百二十六年今

月今日)

△荻生徂來歿す。享保十三年今月今日。(百九十七年前) 大學者

大正七年 朝晴雪

大正八年 田家早梅

大正九年 遠山雪

大正十年 社頭曉

大正十一年

旭光照波

大正十二年 曉山雲

大正十三年

新年言志

大正十四年

山色連天

大正十五年

河水清

一月二十日

〔甲〕 略字のかずく

點數 一號 一號 一號 蟲 學 學 學

蠶 蚕 控 扣 亂 亂 學 學 幸

〔乙〕 ふろのききめ

一、身體をせいけつにする

二、身體のつかれがなほる

三、心もちをよくする

四、血のめぐりをよくする。

子供の中にはふろにあまり入らないものがある。又入つても十分洗はないらし。

一月二十一日

〔甲〕 農業の改良は目下の急務

△俳句

勤めねば人もこ

の世の案山子哉

△備の後で知らる

案山子哉

世の中は日進月歩の勢で進んでゐます。凡てに改良進歩をいたしましたのが、比較的保守的で、覺醒の歩調不統一なのは、農業界でせう。將來農事に志さずものは、大にこの點に着眼して改良進歩の域に達せねばなりません。

△才能は閑地に發達し、品性は激流の間に發達す

〔乙〕 團子の見方いろく

△水晶の珠數とみたらし團子哉

(寺の子)

△鐵砲のたまとみたらし團子哉

(武士の子)

△そろばんの珠とみたらし團子哉

(商人の子)

一月二十二日

〔甲〕乙 麥に親切がたらぬ

米の價が高くなると、稻には十分骨ををるが、割合麥には、農家一般が不親切で稻ほど眞劍になつてゐるものはない。麥も馬鹿にはならぬ、なか／＼使ひ途もあるし、骨折り次第でとれます。みなさんの家でも、麥を可愛がつてやるがよい。

△言語の謹慎は能辯に優れり

一月二十三日

〔甲〕 略字のかずく

距離||巨萬 邊||辺 體||体

獨||独 與||与 擔||担

〔乙〕 童雪

お山にふる雪 お山につもる

燈籠にふる雪 とうろにつもる

お屋根にふる雪 すゞめがたべる

お池にふる雪 緋鯉がたべる

一月二十四日

〔甲〕乙 今日の歴史

△明治四年今月今日、始めて東京大阪間に郵便を設けた。今は飛行機郵便さへ設けられた。

△俳句

菘かぶる下に錦
や冬牡丹

△徳川秀忠二代將軍薨去（二百九十三年前）

△瀧鶴臺逝く（百五十二年前）

この人の妻に名高いお話があります。

一月二十五日

〔甲〕 暗夜に提灯

船長は燈臺の光りを當にして、夜の航海をします。暗夜道行く人は、提燈の明りに便るのです。農家の燈臺は經驗と學理であらう。將來の農民は益々學理の應用と實地とを和合調劑して、意義ある田園生活の勝利者となりたいものだ。

〔乙〕 酒をのむと顔の赤くなるのは

酒をのむと、その中にあるアルコールといふものが、心臓のはたらきを強くします。そして血がよくうごきます。こんなことをいつもくつ々けると赤顔になります、人がこれを猩々といひますばかりでない、身體にもよ

△酒一杯人が飲み
酒三杯人を飲む。

くありません。

一月二十六日

〔甲〕乙〕 長生と幸福になる秘訣

長生と福を願はゞ働けよ

ながれる水にくされるはなし

このごろの青年には割合横着なものがあるらしい。苦しいことや、じやまなことはせないで、出世がしたい。「百姓なんか」といつて都へでて、やはり横着をするから出世をせないで、又生れた所へもどつて來て困るものがある。働くところ、勉強するところに出世ができるのである。

一月二十七日

〔甲〕乙〕 源實朝弑せらる（承久元年正月二十七日）

山はさけ海はあせなん世なりとも

さみにふた心我あらめやも

△北海道廳を設く

（明治十九年今月

今日）

△米穀渡來

（安政元年今月今

日）

と、詠んだ。右大臣兼右近衛大將源實朝公久曉のために鶴ヶ岡の八幡宮にて弑せらる。

一月二十八日

〔甲〕乙〕 煙の都から田園へ

田舎に生れて田舎で大きくなったものが、都の空気を吸ふと、急に田舎がいやになつて百姓なんかきらつて、田舎の青年たちは都へ〜と出かけて、家に残るものは年寄り子どもばかりになるらしい氣持がする。これでは日本の國も困つたものです。住み心地のよい田舎を逃げるのでせう。こゝ一つ考どころです。煙の都からは、あべこべに、美しい田舎へ〜と住宅をうつします。店と住宅と別にする傾です。やはり住むには田舎がよいといふことなのです。

一月二十九日

〔甲〕乙〕 丁稚教訓

△金原明善翁の三綱領

- 一、實を先にして名を後にす
 - 二、行を先にして言を後にす。
 - 三、事業を重んじて身を輕んず
- △豊太閤薨す
(天正十九年今日)

△奉公に來た日の心いつまでも

わすれず念を入れてつかへよ

△御主人の仰せがあらば早速に

返事よくして御用つとめよ

△奉公を大事とするが何よりも

我親たちに孝行と知れ

一月三十日

〔甲〕乙〕 あゝ有難い新聞紙

(一) 都のこともあなかのことも

千里あちらの他國のことも

一目でわかる新聞紙

あゝちやうほうな新聞紙

(二) 火事が多いぞ、ぬす人があるぞ

農村適用揭示教育資料

△百聞一見にしか

ず

△怠ける者の歩み

は遅し貧乏は速

かに跡を追ふ。

△日英同盟成立す

(明治二十五年今

月今日)

△孝明天皇崩御

(慶應三年今月今

日)

わるい病氣がはやつて来たと

氣をつけさせる新聞紙

あゝしんせつな新聞紙

(三) 人に知られぬ善事をうつし

かげにかくれた悪事もうつす

鏡のやうな新聞紙

あゝ明かな新聞紙

一月三十一日

〔甲〕 伊勢論語

世の中は物のけいこをするがなる

ふじの高根に名をあげよ人

おもふべきものは身より名なりけり

名は末代の人の世の中

△孝明天皇御製

朝な夕な民安か

れといのる身の

心にかゝるとつ

國の船

世の中にせまじきものは我はがほ

そらごとぬすみ勝負いさかひ

〔乙〕 理科問答

一、水入に二つ孔のあるわけ

二、十能に木の柄のつけてあるわけ

三、ランプの口金に孔のあけてあるわけ

二月一日

〔甲〕乙〕 菅公流罪(千二十五年前今日)

東風吹かば香おこせよ梅のはな

あるじなしとて春な忘れぞ

と一首の歌をのこして、住みなれ給ひし都より、西國へ流され給ひし菅公は、大學者で、徳高く行の正しい忠義な心のあつた人であつた。宇多天皇の御時、藤原氏とともに天下の政事をとつてゐられたが、藤原時平のそし

△東京大阪長距離

電話開通

(明治三十三年今

月今日)

り口によつて、つみなき身ながらかくはなつたのである。

二月二日

〔甲〕 略字かぞく

當||当 飛||飛 傘||傘 辭||辭

屬||屬 會||會 鹽||塩 潮||汐

濱||浜 聯||聯 氣||氣 對||對

〔乙〕 笑話 日本一

弟「兄さん日本で一ばん高いところは樺太でせう」

兄「なぜ」

弟「教室にかけてある、日本地圖を見たまへ、一番上にあるじゃないか」

二月三日

〔甲〕乙 物の進む早さ

△人の歩行一時間 一里

△福澤諭吉近く

△努力せば努力に
對する報酬あり

△急行列車 二十九里

△傳書鳩 三十里

△急行電車 五十里

△大風 三十六里半

△地球の廻る早さ 三百四十四里

△大砲 一秒間 四町三十四間

二月四日

〔甲〕乙 動物園のけものは何を食ふか

獅子。一日。牛肉四百匁。四日目鶏卵三十箇（毎日三食）

虎 獅子より安い (一日一食)

熊 精進料理 とうふのかす、あめ、さつまいも (十錢)

象 一日。三圓

駱駝 もみぢ(小麥ひきかす) 干草(五六十錢)

△愚人も沈黙なれば
賢者の如し

△子を持つて知る
親の恩
△人は道に依つて
賢し

鰯 もみぢ(十錢位)
 蜥蜴 雀と馬肉。一週間一回(三四十錢位)
 鶴 どじやう(十五六錢位)
 猿 一日(四五錢)(人に貰つて食ふ)

二月五日

[甲]乙

俳句 農家中行事

一月||年玉であらまし知れる家業哉
 二月||人にする子ならば着せよ雪の笠。
 三月||塀越に物うち語る接木哉
 四月||蛙なく夜やはりきれん糶俵
 五月||産代の短冊に遊ぶ蛙哉
 六月||早乙女やなく兒の方へ植ゑて行く
 七月||玉のあせやがては黄金か白銀か

△忍耐は金剛石よりも貴し

八月||熨斗つける所に困る西瓜哉
 九月||實る程頭をたるゝ稻穂哉
 十月||よその田へ行けとは追はず稻雀
 十一月||豊なる秋や俵のべ心地
 十二月||精出せば氷るまもなし水車

二月六日

[甲]乙

農家俗説 天氣豫報

一、川池の水が急に減るは雨
 二、便所の臭が高いと雨
 三、雨蛙が頻りに鳴くときは雨近し。
 四、蛇の木のぼりは雨
 五、汽笛、汽車のわだちが近く聞える時は天氣變る。
 六、曇つて寒いのも、温いのも天氣に變動あり、

△明治天皇御製

竹馬にのりて手
 習ひに怠りし日
 を思ふ今日哉

七、地震と天候との關係をいふものあり。

二月七日

〔甲〕乙 鵜越のさかおとし

七百四十年の昔、源義経は平氏が難攻不落と頼んでゐた、一の谷の城を見事に攻落した。世に名高い鵜越のさかおとしは今月今日であつた。

二月八日

〔甲〕 略字かずく

舊||旧 雖||虫 晝||昼 聲||声

龍||竜 繼||継 鹿||鹿

〔乙〕 笑袋

無筆者に向つて

「足ぶくろとかいてタビと讀んだ」といひました。

無筆者

「そりや當前さ頭に袋とかいて帽子といひ、首に袋とかいたら乞食よ」

二月九日

〔甲〕 不平と幸福と不幸

△これを式にかくと

不平=(希望-努力)

不幸=(不勉強+病氣)

幸福=(健康+勉勵)

△次の式を考へなさい

優等生=△

劣等生=△

立身出世=△

〔乙〕 ものはつけ題。眞似の出来ぬもの

眞似の出来ぬもの 蟹の横ばひ

△園藝手入

〔根分〕

桔梗。石竹。

花萼蒲

〔種時〕

金蓮花

鶏頭

△始めて新聞紙の

發行を許す

(明治三年今月今

日)

……嬉しい時に怒つた顔
……本で習つた手品

二月十日

〔甲〕乙 今日の歴史

△明治三十七八年戦役宣戦の詔勅下る

△新井白石翁逝く(今より二百六十八年前)

二月十一日

〔甲〕乙 紀元節

神武天皇御東征を遊ばして、大和地方を御平定の上、橿原の宮にて天皇の御位にお即き遊ばされ、建國の礎を定め給ひし、いとも畏き尊き嬉しき記念の日である。

二月十二日

〔甲〕乙 童謡 ゆき

きれいな きれいな 雪だこと

畑も屋根もまつ白だ

きれいでなくつて どうしませう

天からふつて来た雪だもの

二月十三日

〔甲〕乙 範文 一日の仕事を終つて

通し終つて僕はホットト一息ついて、篩を釘に懸けながら、俵の上から汗みどろの手拭をとつて額の汗を拭ふた。糠と別れた真白い米!!「今日の仕事も済んだ」かと思ふと、非常に嬉しかった、身體の疲労も何所かに去つて新しい血潮がムズ／＼兩腕に漲る様な気持ちでした。「明日も……」こんなことを思ひながら納屋から出た。

二月十四日

〔甲〕 略字かず／＼

農村適用揭示教育資料

△千里の道は足下より始まる

△大日本帝國憲法
發布
(明治二十二年
今日)

△天は悔悟を以て
人間の美德とす

△俳句
梅折つて出所な
き藪の中

遠 || 遠 雙 || 双 彌 || 弥 獻 || 献
個 || 個 燈 || 灯 禮 || 礼 發 || 発

〔乙〕 考へごと

- △學問は一生するがよい
- △物書かばよめるやう
- △物讀まば聞えるやう
- △鐵砲はあたるが上手
- △刀は切れるが名作

二月十五日

〔甲〕 昔の金子借用證書

一錢 二貫文

右私入用に付借用申候若し返濟不申候はゞ男にて無之候以上

寛文三癸卯二月十五日

吉兵衛

△後悔とは平日の

油斷なり

△俳句

怠れば畑も野と
なる雉子の聲

△俳句

鶯やあまりにめ
ててこぼれ梅

松藏殿

〔乙〕 笑話 ハイタ、キ

先生「文字は物の形から出来た物です。日は太陽から、月は月様から
といふ様に」

生徒「先生、それではなぜ甲といふ字をハイタ、キと讀まないのです
か」

二月十六日

〔甲〕乙 作物と光

昔から農學者として名高いのは佐藤信淵である。この先生の話によると。

- 稻は 日輪の恩 四分
- 水 の 恩 三分
- 培養の恩 二分
- 土の恩 一分

△世は海なり身は

船なり志は楫な

り楫のとりにやう

あしければ船く

つがへる

二月十七日

〔甲〕乙 長壽者と養生法

- △著者の祖母 (九十六歳) 煙草をのむ酒も少し飲む。
- △グイトル卿 (九十五歳) 煙草のまず戸外運動をなす。
- △グリムソルプ卿 (八十八歳) 煙草のまず萬事節制す
- △ネルソン伯 (八十二歳) 煙草のまず早起節制す
- △メーヨー教授 (八十一歳) 煙草のまず菜食主義、早起す

二月十八日

〔甲〕乙 福島大將薨去 (大正八年今日)

福島大將は中佐時代に獨乙へ研究に行かれて歸途、シベリアを唯獨りて横斷せられた。當時世界の人々は、中佐の勇氣に驚かぬものはなかつた。それからだん／＼出世をせられて大將にまでなされた。退役せられた後は大日本在郷軍人會長となられて、諸國を巡つて在郷軍人や青年團員に講話を

- △ベスタロツチ致す
- (一八五六年今日)
- △三條實美公薨去
- △金原明善翁の家
- 一、君國を重んずる事

せられたり、小學校中學校へもお立寄りになつてお話をせられた。惜しいことに、大正八年今日なくなられた。

二月十九日

〔甲〕乙 弘法大師家庭訓 (仁義禮智信)

- △ちよち／＼。仁の心にて兩手合せて和合の心なり。佛を拜する意あり
- △あたまてん／＼。あたまてん／＼義の心を以つて誠め恐れしむ。頭を出すな我を出すな／＼
- △あはし。口をおさへ口を叩へるが禮儀
- △かひぐり／＼。かいは世界、競争激甚なり智を磨いてかて
- △あいで／＼。信の心なり、まことは無我なり。

二月二十日

〔甲〕乙 我々の睡眠時間

その人の仕事によつてちがふ。まづ

- 一、財産を重んずる事
- 一、衣食住に制限を設くる事
- 一、人は皆其力に食むべき事
- 一、家計は一家の年額を設くる事
- △大鹽平八郎亂を起す
- (天保八年今日)
- 日)
- △己を制する人は

大 人 〓 七時間から八時間

十五六歳 〓 九時間から十時間

六歳以下 〓 十二時間

よく眠るのはよろしい。早く寝て早く起きるのが一番よろしい。

二月二十一日

〔甲〕乙 人體を分析すると面白い。

一、炭素 〓 鉛筆九千三百六十本つくるだけ

二、燐 〓 マッチ八十二萬個つくるだけ

三、鹽 〓 茶さじに二十杯ほど

四、脂肪 〓 蠟燭一挺半 つくるだけ

五、鐵 〓 五寸釘七本 つくるだけ

六、砂糖 〓 角砂糖五十個ほど

七、水 〓 四升二合

最も強し

△國の光は愛國心の熱より發す。

〔甲〕乙 ワシントン生る

尋三の修身書にのつてゐたワシントンは、西曆千七百三十二年の今月今日今を去ること凡百九十六年前にアメリカに生れたのである。小さい時から正直なワシントン大きくなつて、アメリカ十三州の植民軍の元帥として英軍と戦つて、アメリカ獨立を宣誓して、立派に目的を達した、北アメリカ合衆國の建國の父祖ジョージワシントンこれである。

二月二十三日

〔甲〕 訓 持前の味

飛喜百翁といふ人、或日千利休を招待して、西瓜に砂糖をかけて出しました。利休は砂糖のなき所ばかりを食ふて歸り、後門人に向つて『百翁は人をもてなす道を知らず、西瓜に砂糖をかけて出されたが西瓜は西瓜の味がなくてほんとうの味でない』といつて笑はれた。

乙 金言銀語

△聖徳太子薨去

(推古天皇二十九年)

△必勝の術は死を輕んずるにあり

△外からは手もつ

けられぬ要害を

内より破る栗の

いが

△明治天皇御製

桐火桶かきたて

△かんにんのならぬは心の掃除がたらぬ故

△人を悪くいふは己の悪しき故

△辛抱は物事の成就するもとて

二月二十四日

〔乙〕 太陽に縁近い職業と遠い職業人の職業には千差萬別あつて、なか／＼數へきれないです。文明開化に進むに従つてますます／＼様々に分れて來ます。その中で農業者ほど太陽の光を直接に受けるものはありません。會社員や事務員や鑛山夫等は最も少く、殆ど太陽の顔を見ない位だ。日光を直接浴びるものは概して身體強壯である、これに反するものは、身體虛弱で顔色蒼白く元氣がない。そこで農業者こそ、労働も苦しく、肥くさく、泥に塗るとも、自己の職業に忠實なるものこそ身體強壯に財力も増して、幸福なる一生を送ることです。

〔乙〕 お家での行儀

ながら思ふかな

すき間おほかる

賤が伏屋を

△誠を亡ぼす敵は

なし

△俳句

残雪に青き縞織

る麥田哉

△返事は早くはつきり

△目上な人をだいに

△年よりをたいせつに

△兄弟なかよく

二月二十五日

甲) 菅原道真公薨去(千二十三年前)

心だに誠の道にかなひなば

いのらずとても神や守らん

とは、道真公の真心の表はれたものです。あはれ昨日まで廟堂に立ちて天下の政治を論ぜし身、今日は月もる伏屋に世を凌ぎ、只管、勅許をのみまらわび給ひし、道真公は延喜三年春まだ浅き今月今日五十九歳を一期として薨せられた。天神祭はこの日をとつたのである。

〔乙〕 格言

△田園俳句

山蜂の障子なら

しつゝ草の宿

△鷹は陽をよぎる

壘地に霞うすく

△短氣は其の身を亡ぼす腹切刀

△有のまゝは正直の看板

△人をねたむは、かなしみの下地

二月二十六日

〔甲〕乙〕 農村振興金言

△土に親しめ念を入れよ

△身は汚く心は清く

△郷土を愛せよ

△額に汗かけ。ふところ手は無用

△社會に後るな進んで考へよ

△都の空気を吸ふとも吸はれるな

△郷土の娯樂を進めよ

二月二十七日

堪忍は五兩短氣

は相場なし

〔甲〕乙〕 諺

△苦は樂の種、樂は苦の種

△鳥なき里のかうもり

△人は武士身は小粒でも唐辛子

二月二十八日

〔甲〕乙〕 閏年を知る法

神武天皇即位紀元年數が四を以て整除すべき年を閏年とす。

紀元年數より六百六十を減じて百を以て整除し得べきものゝ中、更に四を以て、其の商を整除し得ざるものは平年とす。

三月一日

〔甲〕 仁德天皇御降誕（千六百五十九年前）

曆朝聖明の中、殊に儉素の美德に富ませられ、天下後世をして、其由る所を知らしめ給ひたるは仁德天皇である。浪速高津宮の高殿に登り給ひて、

△大久保彦左衛門

逝く

（寛永十年今月今

日）

△井戸の蛙大海を

知らず

△藤原時平のよめ

る。

△高樓にのぼりて

民の貧しきをお察し遊ばされて、三年の間田租を免ぜられ、三年後富める民の様を御覽遊ばされ、「民の富は朕の富なり」と仰せ給ひしといふ畏き御物語り、今に傳へて有難きことである。

〔乙〕 お日様の大きさ

まい日／＼休まず、世界萬物に光を下さる。太陽の御恩は、なか／＼大へんなものです。又形の大きさもなか／＼なものです。

△さしわたし。

三十五萬五千里

△廣さ

三千九百六十億萬方里

△地球の

一萬二千倍あるといふ。

三月二日

〔甲〕乙〕 草花の種の蒔き方

一、種を第一にえらぶこと

二、砂まじりの軽い土をよく細かにしてよくならしめて、その上へこやし

見れば天の下四方に烟りて今ぞ富みける。
△賢者は往事を推して來事を知る

△書籍の妄用は學問を殺す。

(人糞のうすいの)をやつて種をまく。

三、篩で土をふるいかける。霜よけもする。

四、生えかけたら如露で水をやる。

五、きついこやしはやらぬがよい

六、花を作るはたのしい仕事です。

三月三日

〔甲〕 皇太子殿下海外御巡遊の御門立

建國二千五百八十有一年、未だ曾て先例なき皇太子殿下の御外遊は、大正十年今日午前十一時三十分、横濱港より御召艦「香取」に乗御遊ばされ、遠く歐洲に御旅立たせ給へり。

〔乙〕 雛祭

今日はお節句です。女の子のある家ではお雛様をかざりませう。古くから日本だけにあることです。

△機會に乗ざる準備を怠るな

△櫻田門外の變

(萬延元年今月今日)

日)

△俳句

紙雛やまだ春寒

きふところで

雛祭となりの鐘

三月四日

〔甲〕乙 春蒔の草花いろく

種類	顔	開花期	花色	種類	開花期	花色
朝顔	七八月	色々	金鶏草	六月	黄色	
夕顔	八月	白赤	鳳仙花	八月	色々	
金蓮花	八月	黄	除虫菊	六月	白紅	
コスモス	十月	色々	ハルシヤ菊	六月	濃茶	
向日葵	八月	黄	鶏頭	九月	赤黄	
月見草	五六月	黄	貝細工	九月	白黄	
ダリヤ	六月	色々	翠菊	九月	色々	
庭石菖	九月	ひびき	天人菊	九月	黄茶	
松葉ぼたん	八月	うすべに	孔雀草	九月	黄茶	

三月五日

〔甲〕 徳川家宣公の五教

一、心に我儘ある時は愛敬を失ふ。我儘なき時は愛敬をなはる

二一〇

に招かれにけり
△國家の基礎は其
少年を教育する
にあり。

- 二、心に欲ある時は義を思はず、欲なき時は義を思ふ。
- 三、心に飾ある時は偽をかまふ。飾なきときは偽なし
- 四、心に傲ある時は人を侮る。傲なき時は侮なし
- 五、心に過ある時は人をおそる。過なき時は恐ることなし

〔乙〕 考へ物三つ

- 一、二十里を三つにわけると鳥の名となる (答二十八里) (鶏)
- 二、二十里より一里少ないものは勝手道具一つ (答十九里) (徳利)
- 三、五百四十間の役目あり何役か (答九町) (區長)

三月六日

〔甲〕乙 象形文字の話

皆さんの使つてゐる漢字のおこりは、たいてい、物の形をもととして作つたものでこれを象形文字と申します。

◎日、月、山、川、艸、木、

二一一

△平将門誅せらる
(天慶三年今月今日)

△人は己れ自身を
知ること最も少
し

△養生は薬によら
ず常の身もち心
の内にこそあれ

目、口、弓、車、魚、貝、

三月七日

〔甲〕乙 近江聖人生る

今を去る三百十七年前、近江國高島郡小川の農家に生る。修學に努め徳を磨き、後近江聖人とまで天下に名を轟かした。中江藤樹先生の誕生日です

三月八日

〔甲〕乙 宿根草いろく

種類	花の色	咲く時	種類	花の色	咲く時
時計草	白紫	七八月	水仙	黄白	一二月
ダリヤ	色々	九月	都菊	紫	六月
桔梗	紫白	九月	胡蝶花	白	六月
曇華	紅緋	七八月	福壽草	黄白	一二月
紫苑	紫	九月	芍薬	色々	五月
あやめ	色々	六月	鋸草	白紫	六月

△我は非にして勝
んよりは寧ろ是
にして敗れん

燕子花	紫	六月	虎の尾	白	六月
菊	色々	十月	鳶尾	白紫	六月
烏頭	紫	六月	濱菊	白	六月

三月九日

〔甲〕乙 田園文學（和歌）

△日に幾度すぎる汽車にも落ちつきて

鎌とる今日はやうく來にけり

△肥土を積みし道邊の日あたりに

寒さむのまなかをたんぼぼ咲けり

△のどかにも麥ふみ居れば空高く

ひばりさへづる晝となりけり

三月十日

〔甲〕乙 陸軍記念日（奉天大激戦）

農村適用揭示教育資料

△朝まだらりの晩
げはしり
△接木の季節
△朝起きと木縮き
ものに麥めしは
命も長く家も繁
昌

明治三十八年三月十日 大本營着電公報

「今日午前十時奉天を占領せり、數日來の包圍攻撃は全く其目的を達し、今や奉天附近各所に於ては、非常の激戦中にして、捕虜並兵器彈藥糧食等、諸軍需品の鹵獲、極めて多大なるも未だ調査に遑あらず」

三月十一日

〔甲〕乙〕 驚くべき海軍十六吋砲

△砲身の重さ、二千七百貫（米百五十俵餘りの重さに同じ）

△砲彈。二百六十七貫（米十五俵の目方に同じ）

△砲彈のとゞく距離。八里半

△砲彈のとゞく早さ。十四秒

△破壊力。厚さ八寸の銅鐵板をさんざんにやぶる

三月十二日

〔甲〕乙〕 庭樹のいろく

種類	花色	咲く時	種類	花色	咲く時
蠟梅	黄	二月	百日紅	白赤	八月
梅	白	三月	椿	色々	冬
櫻	色々	四月	卯花	白	六月
桃	紅	三四月	海棠	紅	五月
木蘭	白紫	四月	杜鵑花	色々	五月
藤	白紫	五月	石巖	色々	五月
泰山木	白	六月	躑躅	色々	五月
金縷梅	黄赤	四月	芙蓉	紅紫	八月
山茶萸	黄	四月	ばら	色々	四五月
連翹	黄	三月	山吹	黄白	六月
蘇方	紫	七月	聚八仙	色々	六七月
夾竹桃	白赤	八月			

三月十三日

〔甲〕 上杉謙信卒す（三百四十七年前）

農村適用揭示教育資料

△伊藤仁齋歿す

（寛永二年今月今日）

日）

△智者は一切を自身に求めて愚者は一切を他人に求む

求む

△凡そ半學びたる者は、多言にして常に誤り多し

群雄割據して戦に戦を重ねて、天下麻の如くに亂れし戦國時代、第一の名將關東管領上杉大膳大弼輝虎卒す。實に天正六年三月十三日であつた。

〔乙〕 數字ならべ

△一から十六までを四つの横堅斜どちらへでも三つの數字の和が三十四になるやうに並べなさい。

答

11514	4
12 6 7	9
81011	5
13 3	216

三月十四日

〔甲〕〔乙〕

文 麥踏み

まだ霜柱は解けてゐない。もりあがつた黒土には分蘖フシクワしない麥がひよろ長く伸びて、僅かに根張つてゐるのが、遠くから見ると青く畝づくられてゐる。私は土の附着した重い草履を穿いてさく／＼と音をたてながら一畝々へり。

△正直は最善の方

便なり

と蟹歩みにそれを踏んでゐる。かうして麥は益々根強くなつて行くのだと思ふと、しみ／＼土に親しむものゝ幸福を覺えて強く踏みしめた。

三月十五日

〔甲〕

明治維新の御誓文

明治元年三月十五日、明治天皇紫宸殿に於て我國是を天神地祇に誓はせ給へり。

△開港年月日

横濱

安政六年三月二

日

長崎

同

函館

同

兵庫

- 一、廣く會議を興し萬機公論に決すべし
- 二、上下心を一にして盛に經綸を行ふべし
- 三、官武一途庶民に至るまで各々その志を遂げ人心をして倦まざらしめんことを要す。
- 四、舊來の陋習を破り天地の公道に基くべし
- 五、知識を世界に求め大に皇基を振起すべし

〔乙〕

詠 笹

農村適用揭示教育資料

風のふく日 笹つば見たら

おにごつこしてた

さらさら音させて

あつちへ逃げたり

こつちへ逃げたり

三月十六日

〔甲〕 接木の秘訣

このごろから、接木をいたします。接木の利益は誰もよく知つてゐます。そこで接木の秘訣を一口で申しませう。

△「一に小刀。二に季節。三に技術。」

△「接木するなら三日三晩小刀研いで、かゝれ」

〔乙〕 童謡 南天

南天

慶應三年十一月

七日

大阪

明治元年七月十

五日

新潟

同十一月十九日

△俳句

寒苦して安げに

咲くや梅の花

南天

赤南天

白南天

赤いは山のうさぎの眼

白いは海のかつをの眼

三月十七日

〔甲〕乙

親の心

△芋を見よ子に榮えよと親やせて、ゑごうなつたり、甘うなつたり

△悲しさを誰に問はまし子を思ふ、親の心は親ぞ知る

△稻妻や泣く子をすかす親心

三月十八日

〔甲〕乙 歟かたげた乞食は來ぬが、書物さげた乞食が來る。(諺)

△熱心は假令極端

に奔りたるにせ

よ、甚だ貴ぶべ

き大なるものな

り

△和字

徑(かたい木)

凧(風が木にふ

く)

神(神にそなへ

る木)

鱒(春からたく

さんある魚)

飯をかたげるとは、汗を流してよく働くといふことで、よく働くものは乞食になりません。書物を手にして、ぶら／＼して百姓でもなく學者でもなく、なまくらな人間は乞食になつて困ります。働いて困るものはないが、遊んでゐると困るのである。世の中に働く程尊いものはない。

三月十九日

〔甲〕 楠木正成家訓

- 一、善事をなすを思はんよりは悪事をなすこと勿れ
- 二、鶏鳴に起きざれば日暮に悔あり
- 三、拔群の大功を立てんよりは二君を思ふな
- 四、節儉質素は堡城の如し
- 五、華美慢心は讎敵の如し

〔乙〕 腹八合

うましとて、八九分食へば足るとせよ、十分故に身の害となる

鳴(田におる鳥)

峠(山を下りた

り上がった)

粧(米の花)

△駄馬も統御にて

駿馬に等し

△鮎は瀬にすむ鳥

は木にとまる人

は情の下に住む

三月二十日

〔甲〕〔乙〕 森蘭丸の才智

織田信長七賢人の畫を見て蘭丸をよんで「何をいつてゐるか聞いてこら」といひつけました。蘭丸はかしくまつて襖の前にひざまづいて、暫く耳をすまして聞いて居ました。歸つて來て信長に申し上げるやう「御前のひょうばんをしてゐましたのか私が参りましたら話をやめました」と信長其の才智のすぐれてゐるのに感心して、大そうかはいがりました。

三月二十一日

〔甲〕 弘法大師入寂

眞言宗の開祖空海は、今を去る千九十年前、即ち承和二年三月二十一日高野山に於て入寂す。時に年六十三歳であつた。醍醐天皇勅して弘法大師の號を贈り給ふた。

〔乙〕 俳春

△下見れば我にま

さりし者もなし

笠とりて見よ天

の高さを

△彼岸入

△競争は人生の利

なり

△人に高下なし

心に高下あり。

- △牡丹接ぐや芽の香折々流れ来る。
- △春雨の續くにけぶる禪寺哉
- △雨折々晴れて折々鳴く雲雀

三月二十二日

〔甲〕乙 子の心

- △智識あり學問のある人よりも親に孝ある人を貴き
- △元日や何はなくとも親ふたり
- △孝行といへばかたきに似たれども親に心配かけぬことなり

三月二十三日

〔甲〕乙 春季皇靈祭

畏くも大皇陛下は、毎年春秋の二度に御代々の御靈をお祀り遊ばされま
す。御先祖への御孝養のほど誠にありがたきお手本を我等にお示し下さる
のである。

△一讀の價ある書
は再讀の價あり

三月二十四日

〔一〕 「重箱讀み」の熟語

- 有體アライタイ 雨具アメノモノ 合圖アヒツ 初陣ウツゴエ 初聲ウツゴエ 金佛カナブツ
- 献立ケンリツ 技折シラサキ 重箱シユウキヤウ 値段チゲン 能書ノウガキ 湯桶ユウトウ

〔乙〕 杜鵑

- △鳴かざれば鳴かして見せう杜鵑 (豊臣秀吉)
- △鳴かざれば殺してしまへ杜鵑 (織田信長)
- △鳴かざればなくまで待たう杜鵑 (徳川家康)

三月二十五日

〔甲〕乙 證書授與式

今日は嬉しいことぞせう。勉強の力で、卒業したり進級したりすること
が出来ました。『勝つてかひとの緒をしめよ』で油断をしてはなりません。
△明治天皇御製

△危険なれば又名
譽大なり。

△鶏口となるとも
牛尾となる勿れ

△辛棒は金

いとまなき身も朝夕にいそしみぬ

思ひいりたる道のためには

△昭憲皇太后御歌

みがくずば玉も鏡も何かせん

學びの道もかくこそありけれ

△人は希望に生き
て安樂に死す。

農村適用 揭示教育資料

大正十五年五月五日初版印刷
大正十五年十月十日初版發行

農村適用揭示教育資料 (奥附)

定價金貳圓貳拾錢也



著者 石野清市
東京市京橋區入舟町五丁目壹番地
發行者 藤原惣太郎
東京市京橋區南八丁堀三丁目十番地
印刷者 山崎治兵衛

發行所 東京市京橋區入舟町五丁目壹番地 振替東京一八五一三番 明治圖書株式會社
賣捌所 東京林六合館 大阪柳原書店 名古屋川瀨書店
久留米菊竹金文堂 佐賀大坪惇信堂

(所刷印社星七 部刷印社會書圖治明)

(製本部……關根・中條製本)

291³
7

終

